（故）神山　一先生の想い出

関　博*

神山研究室卒業生の先輩から電話をいただいて，急ぎ千葉大学病院に駆けつけたことをいまだに鮮明に思い出します。それからはや，23年が過ぎますが，毎年初冬には改めて惜しまれ亡くなられた恩師の思いを深くします。

先生は大正13年に栃木でお生まれになり，高校では陸上の選手としてご活躍されていたとのことで，背筋のぴんとしたユニホーム姿の写真を拝見したこともあります。昭和23年3月に早稲田大学理工学部の土木工学科を卒業され，そのまま大学に残られ研究者・教育者としての道を歩まれることになりました。先生は土木工学科の第2期生で，学科としてもその後の土木工学科を担うスタッフの重要な一員として多くの期待をかけられていたようです。早稲田大学の土木工学科の創設やその後の発展に大きな貢献をされた（故）青木楠男先生の言にも「神山君の将来に大きな期待をもち，早稲田大学のコンクリート工学研究の中心人物に育ってもらいたい」との記述が見られますし，その後につきましても「早大土木科のコンクリート研究を背負って立つようになってからの彼は，私の期待によくこたえてくれた」と述べています。

学生時代の想い出

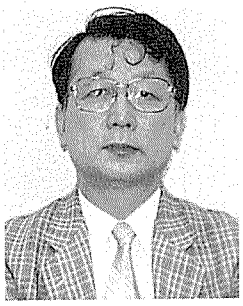
授業としてはコンクリート工学（鉄筋コンクリート，プレストレストコンクリートを含む）およびコンクリート実験を担当されていました。教科書を抱えて，修験者のような研究者としての面影を色濃く残して厳しい表情で教室に入ってこられるのが通例でした。しかし，ほどなく教育者の顔に戻り，授業では学生の質問に丁寧に答えておられた印象があります。

学生は4年次に卒論を履修し各研究室に分かれますが，神山研はその当時は大学本部の演劇博物館の左前の建物の半地下階にあり，構造実験を主体とした研究で厳しい指導で有名な研究室でした。当時は研究設備や研究室は完備されているとは言えませんでしたが，狭いながらも密度の高い空間であったと思います。小生が研究室に入ったときには，多分，博士1名および修士4名（であったかと思いますが）の先輩がおり，卒論生7名と当時としては大きな研究所帯でした。先生も40代前後で精力的に研究・教育に邁進されていた時期かと思います。学部生はそれは知る由もなく，与えられたテーマを先輩に教わりながら少しずつ進める状況で先生としては物足りなさを感ずることも多々あったことかと思います。小生はペアとなった学生と2人でプレストレストコンクリート部材の上面を加熱したときの（先生は，アスファルト舗装を想定していたようですが）部材内の温度分布や温度変化に関して熱伝対を用いて実験を行い，実験のプロセスでは迷走することもあったのですが，徹夜で温度測定を実施しデータを揃えたときにはお褒めの言葉をいただきました。先生はほとんどアルコールは口にされませんでしたが，研究室の先輩や卒論の仲間は飲兵衛が多く，それは厳しいながら楽しい卒論生活でした。

卒業生との交わり

先生は研究には厳しい方でしたが，その一方で卒業生には真摯な態度で接しておられました。卒業生の相談に対しては学生にも助力させて資料を調べ質問に答える，アドバイスを与えるなどもしばしばであったと聞いております。研究室に専門的な問題でお伺いしたときには，書庫より文献を取り出して丁寧に説明されるとともに，手ずからコーヒーを入れていただき恐縮したことを覚えています。また，小生が国の研究機関に勤務していた折に，先生から問合せを受けその丁寧な物言いに卒業生に対しては社会人として対等に扱っていただき，先生の権威をかざして振舞うことのない誠実なお人柄に感銘を受けたこともありました。先生は卒業生との交流を大切にし，それが研究室の卒業生が自主的に先生を囲む会「神山会」を発足させたもととなったと思われます。さらに，勉強会として昭和41年より「コンクリート懇談会」が活動を始め，卒業生と研究室の学生が集い定期的にコンクリート関係の材料・設計・施工の諸課題をテーマとし，先生を中心として活発な討議を行ってきました。また，毎年秋に開催されます「土木学会年次学術講演会」ではその合間を縫って，夕方に卒業生と研究室の合同の懇親会が催され，先生の講和をお聞きするのも楽しみの一つでした。このような席でも先生はビールは少し舌をぬらす程度でしたが，料理に関しては美食家の一面も持ち合わせておられました。ある懇親会で中華料理の席のときに出された料理の詳かな説明とその博識に驚いたこともあります。

先生は理工学部全体の教務主任も務められ，その誠実な人柄で学部学生とも接したようです。しかし，当時は学部長室が占拠されるなど学内が荒れた多難な時代であったようで，このような学生とも向かい合い真摯に対話を繰り返



* *Hiroshi SEKI*
早稲田大学 理工学部

し，精神的にも体力的にもたいへんに疲労を蓄積されてしまった時期であったようです。

研究者：神山先生

先生は研究に対して妥協せぬ厳格な態度を保ち，自己に対して厳しいとともに，他人に対しても研究においては厳しさを強く求めておられたと思います。絶えず頭の中は研究の進展を考え，救道者の雰囲気をおもちでした。

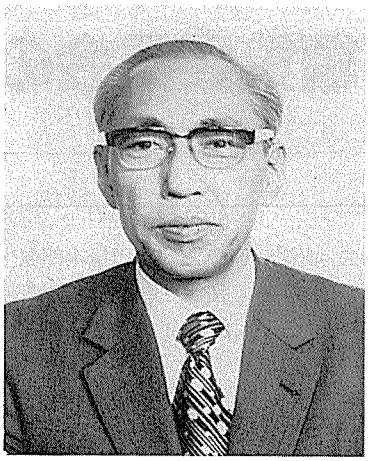
先生の研究業績は，その後に卒業生・研究室有志によってまとめられた「神山一博士論文集」(昭和53年12月10日発行，発行者：神山会，コンクリート懇談会) に漏れなく収録されています。いま，論文集を閲覧しますと改めて研究分野の広さとその斬新な成果に驚かされます。これらは，

- 型枠の設計に関する論文
- 材料に関する論文
- ひび割れに関する論文
- 鉄筋コンクリート梁のせん断耐力に関する論文
- 終局強度に関する論文
  - 曲げおよびフレーム構造に関する論文
  - ねじりおよび軸力に関する論文
  - 設計に関する論文
- プレストレストコンクリートに関する論文
  - 碇着長さに関する論文
  - 断面急変部に関する論文
  - 温度応力および動的特性に関する論文
- プレキャストコンクリートに関する論文

と極めて多岐にわたります。とくに，鉄筋コンクリートのせん断，RC部材の終局強度理論，プレストレストコンクリートの設計理論などではその業績はつとに著名でした。また，これらの研究成果などももととして，多くの書籍も執筆されています。たとえば，学生時代から愛用していました「鉄筋コンクリート」のほか，「プレストレストコンクリートの設計」，「土木材料学」などが挙げられます。

先生の御略歴

最後に先生の御略歴を簡単に紹介させていただき，本稿を閉じたいと思います。



(故)神山　一先生（第２代編集委員長）

大正13年 4月	栃木県に生まれる
昭和23年 3月	早稲田大学理工学部土木工学科卒業
23年 4月	東京大学大学院特別研究生
26年 4月	専任講師
32年 4月	助教授
32年12月	工学博士
40年 4月	教授
43年 9月	理工学部教務主任（～44年７月）
49年 5月	プレストレストコンクリート技術協会理事および編集委員長
51年12月18日	御逝去

神山先生と深い親交があった研究者，身近で先生の直接の御薫陶を受けた研究室OBの方々は多々おられます。これらの方々の先生への想い出は広く深いものと思いますし，先生の物の見方・考え方に接する機会も多かったと思います。残念ながら，小生のこの一文は先生のほんの一面を述べたに過ぎません。厚顔にも先生の想い出を書かせていただきましたが，改めて先生の大きさを想い起こした次第です。

【1999年11月22日受付】